

令和五年度 統一模試 中学三年 第二回

統一実施日 八月十九日 (実施時間五十分間)

国語

注意

- 1 問題用紙は表紙を入れて八ページです。これとは別に解答用紙が一枚あります。
- 2 監督者の指示に従って、解答用紙を取り出し、番号と氏名を解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。また、解答用紙の「二次元コードシールをはる」と書かれたわくの中に、シールをはみ出さないようにはりなさい。
- 3 監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 4 答えは、問題の指示に従ってすべて解答用紙の答えの欄に、はみ出さないように記入しなさい。
- 5 筆記用具は、HBかそれよりも濃いものを用い、文字がうすくならないように注意しなさい。
- 6 監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

氏 名

1

次の1・2の問いに答えなさい。

1 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は仮名に直して書け。

- (1) ウチュウについて学ぶ。 (2) 天然資源にトむ国。
 (3) 台風のヨチヨウとなる雲。 (4) 過去の失敗を戒める。
 (5) 会議の論旨とずれる。 (6) 迅速な対応に感謝する。

2 次の行書で書かれた漢字の中から、「体」の「偏」、「活」の「偏」

のどちらと組み合わせても、常用漢字となるものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 公 イ 犬 ウ 永 エ 中

2

次の文章を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。(1)～(6)は形式段落を表している。

君は誰かに似ているねと言われると、非常に腹を立てる人がいる。

その人の言い分を聞くと、自分はあくまで自分であって、誰かに似ていると言われるのは心外だとのこと。自分は自分である、これは動かしがたい事実ではある。しかし、そのことと自分が誰かに似ていることは両立しないことだろうか。同じだと言っているのではないのである。^①違いが認められるからこそ、似ているという言葉が用いられているのだ。外見が似ている場合もあるだろう、また、その仕草、立ち居振る舞いが似ている場合もあるだろう、さらに、その醸^かし出す雰囲気^きが似ている場合もあるだろう。しかし、どこか違うところがあり、それがその人の人らしさを形成していることが、暗黙のうちに承認されているのである。自分が自分であるとは、他の一切のものから

あらゆる点で違っているということではない。むしろ、ひとつひとつの点は似ていても、それらが独特の仕方で統一されていることに、自分が自分であることの本质があるに違いない。^①

では、その統一の仕方とは何か。われわれが世界に向かうとは、ただ単に世界の前に立っているということではない。自らの価値観の下に、世界を位置づけ、意味づけているのである。――、各人の世界は各人の意味づけの仕方によって、微妙に異なっているだろうし、異なったものとなっていくだろう。自らの価値観を具現したものが世界への姿勢であり、その限りでそれはきわめて実践的である。だが、

この価値観はどのようにして獲得されてきたのであろうか。各人が各人固有の価値観^(註)を生得的にもっているわけではない。明らかに、成長の過程でそれをわれわれは身につけてきたのである。引っ込みがちとか、押しが強いとかといった性格の違いはたしかにあるけれども、^②それだけでわれわれの価値観が決まるわけではない。^②

まずは他人から学ぶこと、つまり、真似^{まね}ることからわれわれは自分の価値観を形成し始めるのである。それも、個々の具体的な行為を真似するという仕方、少しずつ身につけていく。ある行為を実際にやってみて、その経験を通してその行為に対する価値づけ、意味づけを決定する。そういった無数の経験をを通して、最初はほとんど同じ出発点からスタートしたのに、ほんのわずかのずれが積み重なって、ついにはまったく異なった価値観の形成にまで至るのである。そのずれを生み出すものがなにかは究極のところ分からない。性格というよりも、それはむしろ人柄、人格と呼んだ方が適切であろう。いずれにせよ、われわれが誰かに似ているのは当然である。似ようとしてきたのだから。しかし同時に、その誰かとは違っているはずである。なぜならば、無数の経験を通して、無数の人々の真似をしてきたのだから。^③

横になってテレビを見ていて、自分のその姿がかつての父親の姿とそっくりであることを発見して、驚くということがある。歩き方が親父そっくりであるとか、喋り方、笑い方が母親譲りであるとか。こういうとき、つい遺伝ということを考えてしまうが、それだけですべて説明のつくことではなからう。遺伝の要因もあろうが、身近に生活することから知らず知らずを受ける影響が大きな比重を占めていると思われる。いずれにせよ、遺伝であれ、模倣による影響であれ、自分のなかに他人との類似を見出すことは、決して少なくない。そのときわれわれは、錯覚に陥りがちである。他人がわれわれに似ている、自分がオリジナルで、他人がコピーであると。しかし、ここでどちらが原型かを問題にするのは見当外れである。たとえ、ある人に対しては自分がオリジナルであつても、別のある人に対しては自分がコピーだからである。⁴

自分のなかの他人は、自分がこれまで生きてきた過程で出会った多くの人びとであり、さらにその人びとのなかにはその人びとが出会った多くの他人が含まれている。ちょうどそれは、大きな箱のなかにそれより小振りの箱があり、その箱のなかにはそれより小振りの箱があるといった、入れ子の構造になっていると言えよう。^③それらの人びとは長い歴史のなかで匿名性を獲得し、ひとつの制度、慣習という形をとることもある。それらの制度、慣習に縛られてわれわれは成長するしたがって、われわれが初めて自分という問題に気づいたとき、最初にわれわれが自分から排除しようとするのも、これら制度や慣習である。そこで意図されているのは、自分の純化ということであろう。つまり、自分のなかから自分以外のものを排除していけば、純粋な自分を獲得できるだろうという発想である。⁵

しかし、すでに述べてきたことから明らかなように、自分の純化の

試みは失敗に終わるしかない。なぜなら、自分の成立のためには、不可避的に他人の関与を必要とするからである。これは、人間がいわば未成熟なものとして生まれ、他人による保護、養育をどうしても必要とすることを見ても明らかである。自分とは、真似ることを取り込んだ他人とのわずかなずれから垣間見られる虚像のようなものである。自分を見極めたいのであれば、徹底して自らのなかの他人を点検するしかない。それらの他人がどういう形で自分のなかに組み込まれているかを。そして、その点検・吟味の過程こそが自分と他人のずれの確認であり、自分というものの確立の第一歩である。自分は他人のなかにしか存在せず、自分は自分にとつてもつとも遠いものとなる。そういう意味で、自分のなかの究極の他人とは自分のことである。⁶

(池上哲司「傍らにあること——老いと介護の倫理学」による。一部省略等がある。)

(注) 生得的Ⅱ性質が生まれつきである様のこと。

1 本文中の□にあてはまる語として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア けれども イ したがって
ウ ところで エ なぜなら

2 次の文は、――線部①がどのようなことをいっているのかを説明したものである。□Ⅰには最も適当な六字の言葉を、□Ⅱには最も適当な八字の言葉を形式段落①から抜き出して書け。

他人との違いが□Ⅰを形成しているのであるが、そもそも他人との違いがあるということは、他人と似ているところがある一方で□Ⅱがあるということ。

3 次の文は、――線部②について、筆者は、価値観はどのように形成されるといつているかを説明したものである。――に「経験」という語を用いて六十字以内でふさわしい内容を書け。

価値観は性格の違いだけで決まるのではなく、われわれが

ため、まったく異なったものとして形成される。

4 ―線部③とあるが、このことを説明しているものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 家族や友人といった自分の近くにいる他人は歴史的には無名であつても、実際にはわれわれに制度や慣習を教える存在にもなつてゐるということ。

イ 自分のなかの他人はまた多くの他人とつながりあつており、そのつながりの強弱によって人びとが伝承する制度や慣習も変わつてくるということ。

ウ 自分のなかの他人はより多くの他人をそのなかに含み、それはいつしか特定の誰かでなくわれわれに影響を与える制度や慣習にもなるということ。

エ これまで対立してきた他人はいくら排除しようとしてもひとつの制度や慣習になつており、今後変わることもなくわれわれを規制するということ。

5 本文の形式段落①～⑥を「似ていることとは」、「価値観の形成」、「オリジナルかコピーか」、「自分という存在」の四つのまどまりに分けるとどうなるか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア ①――②――③――④――⑤――⑥
イ ①――②――③――④――⑤――⑥
ウ ①――②――③――④――⑤――⑥
エ ①――②――③――④――⑤――⑥

3 次の文章を読んで、あとの1～3の問いに答えなさい。

孟嘗君、秦の都を去りて帰国を急ぎけるに、函谷の関におちきたる。

あとより敵近づきけるに、この関、法にて曉に鶏鳴くを聞きて関の戸を開く。求むれども、夜深ければ戸を開かず。いかげんとわづらふ

処に、下座の者に、よく鶏の声を似する小兵あり。彼にひとこゑ時を

つくらせしかば、関の鶏みな鳴きける。関守、戸を開きて通しけるとぞ。

(齊藤徳元「尤之双紙」による)

(注) 孟嘗君 人名。

秦 古代中国の国名。

函谷の関 関所の名前。

下座の者 家来。

小兵 小柄な武者。

関守 関所を守る人。

1 ―線部「ひとこゑ」を、現代仮名遣いに直して書け。

2 〓線部ア～エの中から主語が異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

3 次は、本文の内容をもとに先生と生徒が話し合っている場面である。
る。ⅠⅡⅢに適当な言葉を補って会話を完成させよ。
ただし、ⅠⅡⅢには十五字以内でふさわしい内容を考
えて現代語で書き、Ⅱには本文中から最も適当な言葉を漢字
一字で抜き出して書くこと。

先生 「この話では、『函谷の関』という関所での出来事が描かれて
います。この関所にはあるきまりがありました。それは、
どのようなものだったでしょうか。」

生徒A 「Ⅰ、関所の戸を開くというものでした。」

先生 「そうですね。だから、最初からすぐに関所は開きません
でした。後ろからⅡが迫っていたので、逃げるため
に孟嘗君は関所を開けてもらう方法を考えて、実行しまし
た。それはどのような方法だったでしょうか。」

生徒B 「Ⅲという方法です。この方法によって、関所を開
けてもらえたのだと思います。」

先生 「そのとおりです。よって、この文章には『物によく似せて、
幸ひになりたるためし』という題名がついているのです。」

4 次の文章を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。

江戸のざる職人である「男」は、十七歳で父親を亡くして以来、
弟と二人でざるを作り、それを売り歩いて一家の生活を支えてい
た。三つ下の弟は器用で愛想もよく、しだいにあちこちの客から鼈
尻にされるようになる。ある日「男」は、弟と出店の前を通りか
かり、鮮やかな飴菓子に心を奪われる。値段を聞き、自分たちに
は手に入らないものだと言う「男」に対し、弟は「俺の手にかか
れば、そうでもない。」とおどけた調子で返した。

それから十日ほどが経った日である。夕方、ざる売りの商いから戻
ると家には誰もおらず、空腹だった男は饅頭のひとつもなからうかと
台所の戸棚を開けた。そしてそのまま射抜かれたように立ちつくした。
戸棚の奥に、有平糖（注あるへいとう）のあの箱が隠されていたからだった。取り出し
て蓋を開けると、出店で見たままのきらびやかな菓子が並んでいる。

どうしてあんな菓子が手に入ったのかと男は混乱し、それから弟の
台詞を思い出した。

② あいつのことだ、きつと誰か羽振りのいい客でもたらし込んで、買
つてもらったのだろう。ここに隠しているということは、ひとりでこ
つそり食うつもりだったのだろうか。それとも、兄貴は諦めるよりな
かったが自分なら大抵のものは手に入れられるのだと、このあとじつ
くり見せつけようという魂胆だろうか。

普段の弟の様子から想像するだに、その推量こそ正しいらしく思わ
れた。男は唇を噛む。

人が這いつくばって引つかかって傷をこさえて進んでいくところを、
ツルツルヘラヘラ渡りやがって。

男は菓子のひとつを摘んだ。しばらく見入ったのち、思い切って口

に放り込んだ。

刹那^{(注)せつな}、砂利^{(注)じり}を嚙んだような感触が齒に伝い、口の中が土と脂臭^{(注)やにくさ}さでいっぱいになる。

「なんだえ、こりや」

③ 男はたまらず表に出て、唾^{(注)つば}と一緒に吐き出した。よくよく改めるとそれは有平糖ではなく、なにか別の材でできた模造品だった。男は蒼くなり、次に血を上らせる。

あいつは初手^{(注)しよて}から、わつちをだます腹だったのだ。菓子なんぞに夢中になって浅ましいと兄をわらい、ざるだけでなく、どんな細工物も巧みに作る自分の器用さをここでも見せつけようとしたのだ。

菓子を戸棚に戻そうとしたが、ひとつ欠けたのをどうしようもない。惑^{(注)まど}っている裏の道から足音がして、男は菓子箱を持ったまま隣の空^{(注)あき}店^{(注)だな}に飛び込んだ。

一緒に買い物にでも行っていたのか、ほどなくして母と弟の話し声が薄い壁伝いに聞こえてくる。米をとごうか、それより火をおこしておくれ、という短いやり取りのあと、「あれっ？」と、弟の素^{(注)す}っ頓^{(注)とんきず}狂^{(注)きやう}な声が響いてきた。

「母さん、ここに置いてあった菓子はどうした？」

男は壁に耳を当てたまま、身を堅くする。

「菓子？ そんなものあったかえ」

「もっとも本物の菓子じゃあねえのだが。わつちが粘土でこさえたものさ」

粘土と聞いて、男はもう一度唾を吐き、「ちきしょう」と、うめいた。

「また、お前は。そんなおかしなものをこさえて」
「兄やんが食いたそうだったからさ。でも本物は、到底買える代物^{(注)しろもの}じゃあねえ。だからそっくり同じものを作っちゃったんだ」

「馬鹿だね。そんなもんこさえたって食べられなけりや同じじゃないの」

「それでもねえさ。にせ物でもさ、見映えが本物に劣らなきや、持つてだけで気が済むこともあるのさ。この世には、どうあがいても手に入らねえものがある。それはしょうがねえ。でもにせ物でも手元にありやあ、みじめな気分にならねえよ。俺、兄やんにはちよつとだつてもみじめな思いをしてほしくねえのよ」

「あんたはいつもそれだ。よつぽどあの子を崇^{(注)あが}めてるんだねえ」

母が茶化^{(注)ちやか}しながら言うのが聞こえたが、男は話が飲み込めず、いつそうきつく壁に耳を押し付ける。

「そりやそうさ。兄やんの作るざるはなにしろすごいもの。でも恥^{(注)ち}ずかしいから、兄やんには内緒だよ」

弟は、まだ子供らしさの残る声で続けた。

兄やんのざるはさ、目も均一で細かくて、骨ひごの合わせ方も隙がないだろ。材が弱いときは、太く切った竹を底に十字に渡してさ、ささくれが出ないように切り口に蠟^{(注)ろう}を塗って仕上げる手間をかけてんだぜ。兄やんの作るざるは、公方^{(注)くほう}様に献上^{(注)けんじやう}したって恥^{(注)ち}ずかしい品さ。

要領よく仕事を進めるばかりの弟が、自分の作業を細かに見ていたことも、地味で手間のかかるやり方に価値を見出していたことも、男には案外だった。

「俺はついつい、見映えがよけりやいい、つてとこで仕事を終わらせちまうだろ。粘^{(注)ね}ねえのよ。兄やんみてえにやりてえんだが、性分^{(注)しやうぶん}でさ。俺がこないだこさえてみた有平糖だって、兄やんが作りや本物と同じくれえの迫力^{(注)はくりき}が出ると思うんだよ。色形^{(注)しきぎやう}だけじゃなくつて、そのものの佇^{(注)たて}まいまで取り込んじゃうつてえのかさ。兄やんの仕事つてのは、そういう高いところにあるものなんだ」

もういいから早く火をおこしておくれ、と母の遮る声したが、弟は生返事(なまへんじ)をして話をやめなかった。

④「やっぱり俺みてえのは、どうやったって兄やんには敵(かな)わねえんだよ。今は強がつて兄やんと肩並べてっけど、十年後か二十年後かわかんねえが、そんなとき俺は、兄やんに向かつて『負けました』って頭あ下げてっと思う」

母は笑い声を立ててから、少し調子を落としてきいた。

「それでいいのかえ？ あんたは」

沈黙があつた。しばらくして弟の小さな声が忍び込んでくる。

「わからねえ。でも、それはそれで、俺はうれしい気がするな」

男は、ずつと身を堅くしていた。わっちは、いくつものやり方で弟

を裏切つたんだな、と思った。飯の炊ける香りが漂つてきていたが、

男はそこを動けなかった。

「兄やん、遅いな」

弟の案じ声を聞きながら、夜が更けてもなお壁に身を預けて、ひとり、うずくまつていた。

(木内昇「二両札」による。一部省略等がある。)

(注) 有平糖Ⅱ砂糖と水飴を煮詰めて着色し、細工をした飴菓子。

刹那Ⅱきわめて短い時間。瞬間。

わっちⅡ私。江戸の庶民の言葉で、自分のことを指して使った。

公方様Ⅱここでは江戸幕府の將軍のこと。

生返事Ⅱいい加減な受け答え。

1 線部①「ように」と同じはたらきのものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア 明日は休むように言われた。

イ やつと走れるようになった。

ウ あの女優のようにになりたい。

エ せきを切ったように話し出す。

2 線部②とあるが、日ごろ「男」が弟をどのように思っている

ことが読み取れるか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 生活のために懸命に働く自分と違い、好き勝手に生きる弟をうらやましいと思っている。

イ 何も買ってもらえない自分と違い、何でも買ってもらえる弟を憎らしいと思っている。

ウ 貧しくても真面目に生きている自分と違い、平気で悪事を働く弟を嘆かわしいと思っている。

エ 苦勞して生きている自分と違い、要領よく世の中を渡る弟を気に入らないと思っている。

3 線部③とあるが、弟はどのような目的で模造品を作ったのか。「見映え」という語を用いて六十字以内で説明せよ。

4 次の文は、弟が線部④のように感じている理由について説明したものである。Ⅰには最も適当な十二字の言葉を抜き出して書き、Ⅱには十五字以内の言葉を書き、文を完成させよ。

ぎる作りにおいて、兄はⅠで作業をして、公方様に献上しても恥ずかしくないような品を作ることができるが、自分
は見映えに満足して、Ⅱから。

5 本文の表現と内容について説明したものととして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 物語全体を弟の視点に寄り添って描写することで、弟の心の葛藤(かつらう)を描き出している。

イ 江戸時代の文化を忠実に描き、現代の人にはない家族の情愛に迫ろうとしている。

ウ 壁越しに聞こえる弟の話し声を丁寧に表現し、その心情を細やかに描き出している。

エ 高級品である菓子と日用品のぎるに、兄弟の対照的な生き方をそれぞれ重ねている。

あなたの中学校では、毎年地域の幼稚園の幼児とのふれあい活動を行っています。活動を行うにあたり、幼児にかける言葉についての考えを述べ合うことになりました。資料1は中学校から配られたプリントの一部、資料2は、あなたのグループで述べられたAさんの意見です。

資料3を参考に、あとの(1)～(3)の条件に従って、あなたの考えを書きなさい。

資料1

幼児とのふれあい活動

〈活動名〉

「秋を見つけよう」

〈目的〉

- ・幼児に、季節を感じるものを見つける喜びを味わってもらう。
- ・幼児に、身近な植物などへの関心をもってもらう。
- ・幼児に、友達と一緒に活動する楽しさを感じてもらう。

〈内容〉

秋を感じるものを探す。

(例) 様々な色の木の葉、どんぐり、松ぼっくり、すすき、いちよう、もみじ、コスモスなど。



(昨年度の活動の様子)

資料2

幼児について

- ・自分でできたことや考えたことを、ほめられたり認められたりすると、達成感を味わい自信をもって行動しようとする。
- ・自分がしていることについて問いかねられると、自分の言葉で答えようとしたり、興味をもって行動しようとしたりする。
- ・生命の不思議さや尊さに気づくと、命あるものを思いやり、大切にしようとする気持ちをもって関わろうとする。

資料3

私は、幼児がどんぐりを拾った場面で、「どうして秋になると、どんぐりは地面に落ちるのかな」という言葉をかけたいと思います。

なぜなら、どんぐりが「木の命を未来につなぐもの」だと気づいてほしいからです。どんぐり拾いは、資料1にあるように「季節を感じる」もので、「身近な植物」に触れる経験になります。また「木の命をつなぐ」ものであるという理解は、資料2の「生命の不思議さや尊さ」の理解、そして命を大切にする気持ちや思いやりにつながると思います。

条件

- (1) 第一段落には、幼児に対してどのような場面でのどのような言葉かけを、資料1、資料2を参考にして解答用紙の空欄に、前後の言葉に続くように書くこと。
- (2) 第二段落には、第一段落で書いた言葉をかける理由を、資料1の目的、資料2のそれぞれから必要とする情報を取り上げ、それらと結びつけて書くこと。なお、第二段落は、六行以上八行以下で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。